

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

共通彫塑研究室

戸田裕介教授

『チェッリーニ自伝： フィレンツェ彫金師一代記 上・下（岩波文庫）』

古賀弘人 訳，岩波書店，1993



希代の放蕩家で人殺し、彫刻家、彫金師、画家で音楽家だったイタリアルネサンスの芸術家の自伝である。「矜持」（周囲の評価がどうあれ揺るがない自信）も「プライド」（他者に評価されることで得られる自信）も「高慢さ」（自分を優秀だと思い込み他者を見下すこと）も「うぬぼれ」（実際よりも自分を高く評価すること）も、全てにおいて強烈な自己肯定感で書かれている。自由奔放に書かれた16世紀の風俗や人物描写も興味深い。草稿が発見され出版されたのは18世紀になってからだ。

この人、彫刻には矜持を持って真正面から取り組んでいる。超絶技巧で鑄込んだブロンズ像は今もフィレンツェ市のまんなかに残されている。私は編著『べらべらの彫刻』（武蔵野美術大学出版局）で担当した第2章の元原稿に、彼の彫刻に関する面白い考えを引用していたが、編集者から「本文が長過ぎます」とアドバイスを受け割愛した。これについてはいつかどこかで書いてみたい。

『ぼうぼうあたま』第3版

伊藤光昌〔ほか〕編

（子どもの近くにいる人たちへ）

ハインリッヒ・ホフマン さく，いとうようじ やく，

教育出版センター，1992



館内閲覧のみ

1845年にドイツ人精神科医ハインリッヒ・ホフマンが自分の子どものために出版した絵本。この本に収められた話はどれもこれも少々闇が深くマッドな香りがする。どの話にも救いがないのだ。子どもが考える「何をやっても最後は大人が助けてくれる」とか「ここまでなら大人は許してくれる」という半ば高をくくった「きっと大丈夫なはず」という期待がこの絵本では完全否定され誰もが独りぼっちで世界に放り出される。「マッチで火遊びしたら焼死にしました」「指をしゃぶったらハサミで指をチョン切られました」。「スープを飲まない子は痩せて死にました」子どもの頃にこんな絵本を読んでいたら・・・。幸運にも私は20歳近くになってからこの絵本に出会った。

不思議なのは、この絵本は挿画のせいで怖いと同時にとても愛らしく滑稽なのだ。フランクフルト市には"Der Struwwelpeter"美術館もあり世界中で出版された『Der Struwwelpete』が集められている。是非ミュージアムへもお訪ねあれ。

『細雪 上巻 中巻 下巻 改版』

谷崎潤一郎著，新潮社，2011



よく知られた話だが、谷崎はこの耽美的小説の連載を昭和18年に『中央公論』で開始。2回目を掲載した直後に軍部の弾圧を受け掲載禁止となる（禁止理由：「時局をわきまえない」）。それでも谷崎は書き続け、翌年7月に上巻200冊を私家版として出版している。時は第二次世界大戦まっただなか。谷崎は空襲警報が鳴り響くなか原稿を抱えて避難しながら執筆を続けたという。

華やかな昭和10年代の関西の上流階級の日常を生きる乙女たち。四季折々の風物とともに繊細に描かれた姉妹の心の機微が、米軍の本土空襲のさなか、灯火管制と食糧難ほか死と隣り合わせの環境で書かれたことを想像すると、選ばれた言葉ひとつひとつが輝きを増す。

ポリティカル・コレクトネスが度を過ぎると表現の自由と文化的豊かさは失われる。"コンプライアンス（社会規範／規則）をわきまえなかった"谷崎の抵抗は今も光を放ち続ける。『陰翳礼賛』（中公／角川ソフィア／新潮 各文庫）はもう読みましたか？

『詩学入門』（富山房百科文庫）

エズラ・パウンド〔著〕，

沢崎順之助 訳，富山房，1979



津田塾大学、
東京外国語大学にあり

批評的とは言え、パウンドが"ダメ"と思うものには情け容赦が無い。SNSなら大炎上するだろう鋭利な文体は攻撃的である。派手好きで、気むずかしく、かつ広大な知識と高く深い見識に支えられたパウンド節が全編に炸裂している。アグレッシヴな文体が苦手な人は、もしかすると1章も読み終えられないかもしれない。理屈っぽい私は波長が合うのか、途中苦笑いするしかないページもあるが、どの章も刺激的だ。未知の文学者の名前が出てきたら一旦読み飛ばして後日取り寄せて読むしかない。本書はマジメな文学教育カリキュラムの提案なのだ。

翻訳者沢崎順之助の「解題」にも似たことが書かれているが、本書巻末の『付載 いかに読むか』だけでも一読されることをお勧めしたい。『詩学入門』（原題は人を喰ったようなタイトル"ABC of Reading／読書のイロハ"）は『いかに読むか』を後年詳しく書いたものなのだ。それにしてもこの本から滲み出す感触は何か似ている・・・そうだ！Eminemのラップだ！

『ネオ・ダダの逆説』：反芸術と芸術

菅章〔著〕，みすず書房，2022



本書プロローグで著者が述べている通り〈ネオ・ダダ〉は「反芸術」のレッテルを貼られた「破壊」のシンボルであった。後に日本の芸術を担うアーティストが大勢いたにもかかわらずこの活動はずっと過小評価されてきた。'80年代に学生だった私も、既に先生世代になっていた人たちが若い頃行った奇矯な振る舞い、米国文化を丸飲みして起きた食中毒と見ていた。

一方で、同じく学生の頃知った赤瀬川源平の《宇宙の缶詰》（1964年）には、'80年当時、環境アートやインスタレーションとして「包む」規模を次々に拡大し世界中で注目されていたクリスト＆ジャンヌ・クロードの金と人手と時間のかかる創作コンセプトの終着地点が、20年前に日本の美術家の手でしかも安価な方法でアッケラカンと提示されており痛快さを感じた。

大分市立美術館で長年館長を務め〈ネオ・ダダ〉以降の現代美術収集と展覧会を企画運営し最前線で〈ネオ・ダダ〉を調査研究し続けてきた著者渾身の現代美術評論集である。睽目せよ。

『蒼き狼』 87刷改版（新潮文庫）

井上靖 著，新潮社，2006



高校入試の合格発表から数日経ったある日、自宅の郵便受けに「4月の授業初日までに井上靖著『蒼き狼』を読んで、現代国語の授業初日に感想文を提出しなさい。」という封書が届いた。

物心ついた頃から両親を含め他人に何かを強いられることが大嫌いだった私は勉強と名のつくものは全て嫌いで、小学校の夏休みの宿題など6年間一度もやったことがない。そんな私の趣味は絵を描くことと読書だった。『蒼き狼』は他人に勧められて読んだ数少ない1冊で、しかも珍しく提出できた宿題の課題図書でもある。

高校入学まで何もすることがなかった人生の中でもまれな暇な時間に読んだ。テムジンに共感した記憶はないが“自分もこれから人生の冒険に飛び出すのだ”というワクワクした気持ちを確かに感じた。還暦を過ぎた今、再読してみようと思っている。

『敦煌』、『天平の薨』、『桜蘭』etc...、井上靖のどの小説からも、高く澄んだ青い空と、どこか懐かしい雰囲気を感じる。

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

共通彫塑研究室

戸田裕介教授

『怪奇小説集（講談社文庫）』

遠藤周作〔著〕、講談社、1980



私は小学5年生のとき、ともだちの家の本棚でこの本に出会った。遠藤のフランス留学時代の体験、新学期が始まるまで過ごしたルーアンの安宿の暑苦しい夏の夜や、リヨンの学生寮でのXマス休暇の寒々しい空気。私は今でも11歳当時の「三つの幽霊」を読み終えたときの気持ちを鮮明に覚えている。幽霊は怖かったが、いつか遠い国で暮らしてみたいと強く思った。

1996年秋、ロンドンの美術学校の新年度が始まる直前の9月末の夜、キングスロードのニュースエージェントで手にした朝日新聞ロンドン版に遠藤周作氏の訃報記事を見つけた。「私はこの人のおかげでここにいるんだ」と思った。感慨深い思い出である。

小学生の頃から遠藤周作が書いたものは新聞のコラムから雑誌のインタビュー記事まで、手あたりしだいに読んだ。『深い河』、『沈黙』など純文学はもちろん、万年いたずらっ子の狐狸庵先生のエッセイ集など、遠藤文学には全方位から触れてみることをお勧めしたい。



『ヴェルーシュカ：変容』

ヴェラ・レーンドルフ、

ホルガー・トリュルシュ 著、

鷲沼あや 訳、リブロポート、1987



発売当時VOGUEのスーパーモデルだったヴェラ・レーンドルフ（通称ヴェルーシュカ）の"ボディ・ペインティング"を収めた写真集。ハンブルクのデザイン学校に入学後、写真を撮られた際に自分自身が被写体として魅力的であることを自覚しパリへ赴く。同地でドイツ人最初のスーパーモデルとなる（この辺の情報は未消化のママ資料から引き写しています）。

ファッションモデルを務める傍ら「自分が美しいと思ったものと・・・一体になってしまいたい」という子どもの頃からの強い想いで独自の芸術活動を継続。ホルガー・トリュルシュという写真家（彼は写真を撮る前は絵画と彫刻を勉強していた）の最良のパートナーを得て独特の芸術スタイルを獲得した。

写真集とは言え『ヴェルーシュカ：変容』は記録集ではなくこの本自体が作品そのものだ。作品をこれ以上解説するのは野暮だろう。2024年の今、プロジェクトマッピングを見慣れたみなさんに彼女の試みはどう映るのだろうか？

『原爆初動調査隠された真実（ハヤカワ新書；012）』

NHK スペシャル取材班 著、早川書房、2023



広島と長崎への原子爆弾投下直後、米軍は「原子兵器の効果」について現地で大規模調査した。結果、日米双方の複数の医師や科学者が「残留放射線」を確認し人体への影響の可能性を指摘した。「核種」をつきとめた科学者の手記も残っている。それにもかかわらず米軍は「残留放射線」の脅威を伝える言論を封じ込め、被曝した可能性のある住民に何も伝えなかった。「NHKスペシャル」の取材をもとに書籍化された本書は、調査報道として読むには叙情的表現が散見され読みやすいとは言いが、80年間隠され続けてきた事実を丁寧に暴き出している。

気をつけなければならないことは、いつの時代でも調査・報告はそれを求める政治家の都合でねじ曲げられ、しかも誤った報告や結論が次世代の政策に都合よく使われることだ。

近年、米国やロシアが開発製造する「低出力核」を実戦配備する根拠を「広島と長崎の被爆地に残留放射線の影響は無かった」とするウソが支え続けている。



『一色一生』

志村ふくみ 著、求竜堂、1982



本書の有名な一節「まだ、折々粉雪の舞う小倉山の麓で桜を切っている老人に出会い、枝をいただいてかえりました。早速煮出して染めてみますと、ほんのりした樺桜のような桜色が染まりました。」著者によると、桜の花びらや蕾みで染められるのは薄緑色であって桜色ではない。桜色は、まだ蕾みもつけていない枝や樹皮でこそ染まる。「・・・桜は樹全体に宿している命を、一年間、花を咲かすために、その時期の来るのを待ちながら、じっと貯めていたのです。」この感動的な話から、読者の多くは人生訓や何かストーリー性のある教えを引き出してしまうだろう。文学や宗教や思想の領域ではよりその傾向が強いのではないだろうか。

美術家としての私は、事実に単純に驚き、自然の仕組みに心を打たれ、まずは他の意味やストーリーと結びつけずそのまま感動したい。この本には紬織の人間国宝である著者が、日々淡々と草木染めに向き合う中で得た珠玉の経験が納められている。

『モダニズム以後の芸術：藤枝晃雄批評選集』：反芸術と芸術

藤枝晃雄 著、東京書籍、2017



藤枝晃雄はかつて本学教授として美学美術史を担当。私は学部2年生から大学院まで藤枝の「現代美術論」などを受講した。授業はたいいてい始業時刻30分過ぎに始まり、終業時刻30分前に終わることで知られていた。もう少し長かった気もするが90分の講義科目は正味30分だ。教室の黒板にデッカい字で“授業料返せ！”と誰かがチョークで殴り書きした日、それを見た藤枝は「美術館にも行かない。スライドを映さなければ誰の作品の話をしているのかさえわからない。みなさんへの講義は30分で充分です。」とのたまっていた。今は懐かしい。

私は藤枝から「貸し画廊なんて欧米にはありません。日本では芸術家の地位はお金で買えます。みなさんはお金を払えば芸術家を気取れる場所ではなく、選別され審査される場所で活動を始められることをお勧めします。」と言われた。学生の展覧会場もテーマもスポンサーも大学がお膳立てする今の時代、生きておられたら何ておっしゃるだろうか？



『高校生のための批評入門』（ちくま学芸文庫；ン7-3）

梅田卓夫、清水良典、服部左右一、松川由博 編

筑摩書房、2012



もし、タイトルの一部"高校生のための"を一瞥して「大学生なのに？」と気になった人がいたらこの先は読まなくてよろしい。私のおすすめ本にはジュニア新書もある。マンガもある。写真集もある。年齢や性別や環境の違いで「読まなければいけない本」も「読んではいけない本」も世の中には無い。戦前の多くの本には漢字にルビがふられていた。意味がわからなくても、とりあえずひらがなやカタカナが読めれば全て音読出来たのだ。

読書で注意が必要なのは、それこそ批評的視点で「読む」ことだ。『高校生のための批評入門』も、現在私たちが置かれている環境と、出版当時の社会環境（単行本出版1987年）が異なるので、違和感を感じる箇所もあるだろう。本書には名著・名文・古典の欠片が集められているが、編者の好みや意図や思想で受け取る内容は変化する。出版当時、編者たちが読者としてどんな『高校生』を想定していたのかを想像してみるだけでも批評眼が養われる。